

### Ⅲ 5年間の研究開発の成果と課題

---

#### 1 仮説の検証

##### (1) 仮説1について

###### ア 仮説1

教育課程に、グローバル・リーダー育成を目的とした教科を設定し、グローバルな視点からものごとを捉える学習内容にするとともに、日本の歴史・伝統・文化及びグローバルな課題に係る授業、調査活動、体験活動、交流活動、発表活動等を取り入れれば、日本の歴史・伝統・文化に対する理解が深まり、グローバルな社会課題に対する関心・意欲、探究心が高まり、思考力・判断力・表現力・情報活用能力等が向上し、コミュニケーション能力が身に付くのではないかと。

###### イ 身に付けさせたい能力等

- ① 日本の歴史・伝統・文化を理解する力
- ② 思考力・判断力・表現力・情報活用能力
- ③ グローバルな社会課題に対する関心・意欲・探究心
- ④ コミュニケーション能力

###### ウ 実施内容

###### ① 研究開発2 教育課程の編成

学校設定教科「グローバルラーニング（GL）」を設定し、「GL世界史」及び「GLアクティブ」の実施

###### ② 研究開発3 国内グローバル研修

「GLアクティブ」において英語宿泊研修の実施

###### ③ 研究開発5 大学との連携

「GLアクティブ」「GL探究」[総合的な学習（探究）の時間]において大学訪問や大学教授等の講演・講義・課題研究支援の実施

###### ④ 研究開発6 企業・国際機関等との連携

「GLアクティブ」「GL探究」[総合的な学習（探究）の時間]において企業や国際機関等との訪問、講演、課題研究支援の実施

###### ⑤ 課題研究以外の研究開発1 教育課程の編成

学校設定教科「グローバルラーニング（GL）」を設定し、「GLコミュニケーション英語」及び「GL英語研究」の実施

###### エ 検証方法

- ① 生徒、保護者、職員によるアンケート
- ② 課題研究及びプレゼンテーション等の成果からの分析
- ③ 最終年度は、5年間のアンケート結果等を俯瞰して、仮説の検証を行う。

###### ※ 新型コロナウイルスパンデミックの影響

コロナ禍で現1・2年生は予定したGLアクティブを実施できなかった。GLアクティブで多様な体験と刺激を与え、GL探究で思考を深めるのが本校のスタイルだったので、大きな痛手となった。アンケートは5年間同項目で実施したが、今年度は海外に関する質問等比較評価ができない項目もある。

オ 検証結果

① 日本の歴史・伝統・文化を理解する力

検証に活用したアンケート項目 AとB

A「日本の歴史・伝統・文化について語ることができる。」

平成28年度入学生の学年ごとの変移 と 直近3年間の3学年データの比較

(アンケート実施時期 第1学年と第2学年は2月実施 第3学年は9月実施)

	とても思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言 えばそう思わ ない	そう思わない	全くそうは思 わない
平成28年度 入学生 1年	2.3%	18.5%	44.5%	21.9%	11.0%	2.3%
平成28年度 入学生 2年	7.2%	23.4%	43.8%	16.2%	6.4%	3.0%
平成28年度 入学生 3年	15.6%	23.3%	37.4%	13.2%	7.4%	3.1%
平成29年度 入学生 3年	11.9%	21.1%	39.1%	17.6%	7.7%	2.7%
平成30年度 入学生 3年	8.4%	22.5%	39.4%	19.3%	7.2%	3.2%

B「日本と世界との歴史的つながりを踏まえ、日本の未来の在り方を志向し、グローバルな視点で歴史、伝統、文化、芸術、政治、経済、環境等について考えることができる。」

平成28年度入学生の学年ごとの変移 と 直近3年間の3学年データの比較

(アンケート実施時期 第1学年と第2学年は2月実施 第3学年は9月実施)

	とても思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言 えばそう思わ ない	そう思わない	全くそうは思 わない
平成28年度 入学生 1年	1.5%	8.3%	35.8%	31.3%	17.0%	5.7%
平成28年度 入学生 2年	3.0%	14.9%	36.2%	24.7%	14.5%	6.8%
平成28年度 入学生 3年	10.1%	16.3%	33.1%	21.0%	8.9%	10.5%
平成29年度 入学生 3年	5.0%	12.3%	42.5%	30.3%	6.9%	3.1%
平成30年度 入学生 3年	3.2%	14.1%	44.2%	27.3%	7.6%	3.6%

<分析>

「日本の歴史・伝統・文化を理解する力」とは、グローバルな課題を解決する上で、その前提として日本の歴史・伝統・文化を理解し、それと関連付け、グローバルな課題の解決を提案しようという目的である。当初感じた壁は、生徒たち(＝日本人)は自分たちのことを、自分たちの文化を、地元の歴史や伝統を、思ったより知らないという事実であった。生徒たちは、外国人との交流や海外派遣の際、自信を持ってアウトプットする文化を持ち合わせていなかった。よって日本の歴史・伝統・文

化を理解する活動がまずは必要となった。その役割の第一歩は、「佐倉を知る」というG Lアクティブが担った。本校の徒歩圏内には、伝統的な町並みや国立歴史民俗博物館があり、その理解と連携を基礎にしようという狙いだ。アンケート結果A・Bからは、指定初年度入学生は学年進行とともに順調な意識の向上が読み取れる。と同時に、指定3年目がピークと読み取れるアンケート結果となった。

この理由として、重要な行事と位置付けた「佐倉を知る」が、悪天候とコロナ禍により実施できなかったことが考えられる。また指定4年目からは、課題研究テーマ設定に関する教員側の目的意識が変化した影響もある。当初の3年間は「日本の歴史・伝統・文化」と関連するテーマを強調したが、反面、テーマの固定化につながる現象が数多く見られた。先輩から後輩へ研究テーマのバトンが盛んに行われ、「継続」の重要性は認めつつも、安易な継続への疑問が感じられた。探究活動で重視すべき、課題発見力や創造性を育てていないのではという疑問も感じた。そこで4年目以降は幅広いテーマを認める方向に方針を変更した。よって教員の側も、「日本の歴史・伝統・文化」を強調する場面が減り、そのことが生徒意識に影響を与えたと考える。もちろん年間70の研究テーマが生まれる本校であるから、「日本の歴史・伝統・文化」を踏まえた研究も数多く誕生するが、この仮説にとってはマイナスに作用してしまった。

## ② 情報活用能力

検証に活用したアンケート項目

「プレゼンテーションソフトを使った発表ができる。」

平成28年度入学生の学年ごとの変移 直近3年間の3学年データの比較 現在校生のデータ  
(アンケート実施時期 第1学年と第2学年は2月実施 第3学年は9月実施)

	とても思う う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言 えばそう思わ ない	そう思わない	全くそうは思 わない
平成28年度 入学生 1年	4.5%	17.4%	28.7%	22.6%	16%	10.9%
平成28年度 入学生 2年	14.5%	25.5%	34.0%	11.5%	6.4%	8.1%
平成28年度 入学生 3年	10.3%	20.7%	36.8%	16.1%	9.6%	6.5%
平成29年度 入学生 3年	21.9%	28.1%	30.1%	7.4%	5.5%	7.0%
平成30年度 入学生 3年	15.7%	21.7%	35.3%	15.3%	8.8%	3.2%
令和 元年度 入学生 2年	21.8%	20.5%	36.2%	12.2%	7.4%	1.7%
令和 2年度 入学生 1年	14.6%	28.3%	30.7%	16.5%	7.1%	2.8%

### <分析>

指定4年目までは1年次は手書きポスター発表、2年次はプレゼンテーションソフトを利用した発表、という流れであった。コロナ禍の今年度は、作成途中で密が生まれやすいポスター発表を断念し、全学年ともプレゼンテーションソフトによる発表に変更した。この影響がアンケート結果から明確に読み取れる。本校の教育課程は教科「情報」が3年次にあるため、1・2年次のICT活用の主場面は「総合的な探究の時間」になっている。G L探究を中心としたSGH事業によって、生徒の情報活用能力の向上がはかれたと言える。プレゼンテーションソフトを不得手とする生徒は極めて少なく、多くの生徒への普及がなされた点も注目される。

### ③ グローバルな社会課題に対する関心・意欲・探究心

検証に活用したアンケート項目 AとB

#### A「グローバルな社会課題に対する関心が高く、主体的に社会課題を探究しようとしている。」

平成28年度入学生の学年ごとの変移 直近3年間の3学年データの比較 現在校生のデータ  
(アンケート実施時期 第1学年と第2学年は2月実施 第3学年は9月実施)

	とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
平成28年度入学生 1年	1.8%	8.2%	23.6%	35.0%	22.9%	8.6%
平成28年度入学生 2年	2.6%	21.7%	43.4%	20.0%	8.5%	3.8%
平成28年度入学生 3年	8.9%	16.0%	26.8%	21.8%	11.7%	14.8%
平成29年度入学生 3年	5.2%	10.9%	32.2%	28.8%	14.2%	8.6%
平成30年度入学生 3年	5.6%	12.0%	42.2%	26.5%	10.4%	3.2%
令和元年度入学生 2年	7.4%	10.9%	40.6%	25.3%	8.3%	7.4%
令和2年度入学生 1年	8.3%	17.7%	38.2%	26.0%	8.3%	1.6%

#### B「課題を自ら見つけ主体的に課題について研究を深めている。」

	とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
平成28年度入学生 1年	1.5%	10.9%	26.4%	29.8%	22.0%	9.4%
平成28年度入学生 2年	3.4%	9.9%	34.3%	24.0%	19.7%	8.6%
平成28年度入学生 3年	10.5%	12.5%	26.2%	25.8%	11.7%	13.3%
平成29年度入学生 3年	5.6%	15.4%	39.0%	25.5%	7.5%	7.1%
平成30年度入学生 3年	5.2%	13.7%	45.4%	22.9%	8.4%	4.4%
令和元年度入学生 2年	10.5%	15.7%	44.1%	17.5%	6.6%	5.7%
令和2年度入学生 1年	16.5%	29.1%	33.1%	14.2%	5.1%	2.0%

## <分析>

課題発見力の向上が読み取れるデータである。今年度入学生は1年次から高い数字を示している。その要因を考えた。

### 要因①

令和元年度入学生から、1年次の「総合的な探究の時間」を2時間に増やし、探究の手法・課題発見のヒントを計画的に学んでいくプログラムを組んだ。

### 要因②

課題研究テーマを自由化したことにより、その設定に試行錯誤する経験を得た。そのことが課題発見の難しさと重要性の理解につながった。

### 要因③

探究プログラムの各所で、課題発見の重要性を伝えるようになった。「平時」と「有事」では、生徒の探究マインドセットが異なるのかもしれない。「コロナ禍」は答えのない問いの連続で、その日常そのものが課題発見であった。

### 要因④

海外G Lアクティブがほとんど実施できない中でも、「グローバルな社会課題に対する関心」はコロナ禍以前より高まっているのかもしれない。当たり前の日常が当たり前でないことを実感したコロナ禍により、感染症、医療資源、環境、エネルギーなど、あらゆる社会課題がグローバルなものであることを体験として学んだ影響はある。

## ④コミュニケーション能力

検証に活用したアンケート項目 AとB

**A「英語で他国の人と身近な話題でコミュニケーションができる。」**

平成28年度入学生の学年ごとの変移 3年間の3学年データの比較 現在校生のデータ  
(アンケート実施時期 第1学年と第2学年は2月実施 第3学年は9月実施)

	とても思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
平成28年度入学生 1年	0.8%	8.7%	30.6%	35.5%	18.0%	6.4%
平成28年度入学生 2年	3.4%	9.7%	30.8%	21.1%	21.1%	14.2%
平成28年度入学生 3年	3.4%	14.5%	38.7%	23.0%	14.0%	6.4%
平成29年度入学生 3年	6.3%	14.9%	37.2%	24.9%	10.0%	6.7%
平成30年度入学生 3年	5.6%	13.3%	43.0%	24.5%	10.8%	2.8%
令和 元年度入学生 2年	5.2%	10.9%	38.4%	27.5%	12.7%	5.2%
令和 2年度入学生 1年	5.5%	12.6%	35.0%	28.0%	13.4%	5.5%

## B「異文化を理解し柔軟に受け入れることができる。」

平成28年度入学生の学年ごとの変移 直近3年間の3学年データの比較 現在在校生のデータ  
(アンケート実施時期 第1学年と第2学年は2月実施 第3学年は9月実施)

	とても思う う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言 えばそう思わ ない	そう思わない	全くそうは思 わない
平成28年度 入学生 1年	6.8%	30.9%	4.9%	11.3%	4.0%	1.9%
平成28年度 入学生 2年	10.6%	33.6%	37.4%	10.2%	4.7%	3.4%
平成28年度 入学生 3年	19.5%	26.5%	38.9%	7.8%	4.3%	3.1%
平成29年度 入学生 3年	21.9%	34.9%	30.9%	8.2%	1.9%	2.2%
平成30年度 入学生 3年	20.1%	34.9%	30.5%	8.8%	3.6%	2.0%
令和 元年度 入学生 2年	21.0%	27.1%	36.7%	7.9%	4.4%	3.1%
令和 2年度 入学生 1年	21.7%	38.6%	28.0%	5.5%	4.3%	2.0%

### <分析>

英語によるコミュニケーション力については、劇的な変移は見受けられない。この能力の向上には、英語学習の積み重ね、外国人との英会話体験の積み重ねが必要であり、全生徒対象の成長を期待する場合は、海外派遣生徒数の増加、英語による外部発表機会の増加等が必要と考える。

2つめの表は異文化理解がキーワードとなる。平成28年度入学生の1年次と令和2年度入学生の1年次を比較すると、指定5年間の間に大きく向上したことがわかる。これはSGH事業の成果とも言えるし、この5年間で「異文化理解」「多様性」は社会全体のキーワードになったことから、国民全体に浸透したことが理由とも考えられる。

### カ 仮説1 5年間の検証・成果・課題

① 「日本の歴史・伝統・文化の理解」は、課題研究・国際交流を実施する際の基礎知識だ。この視点が欠けると、浅薄な成果になりかねない。ただし「日本の歴史・伝統・文化」を自分なりに消化し、アウトプットできるようになるには学習時間と実体験が必要だ。高校段階での意識付けは、そのスタートのひとつととらえるべきかもしれない。継続的に歴史や文化に親しむ態度、地域や伝統に関心を持つ意識、これらを育むことが長期的な成長の糧になると信じたい。

② 思考力・判断力・表現力・情報活用能力は、新教育課程での「一丁目一番地」だ。GL探究（＝今後は「総合的な探究の時間」）はトータルな学びを体験する最高の舞台と言える。本校では、探究で経験する学習スタイルが、多くの教科に波及している。英語・国語・理科・地歴公民・保健・家庭・情報などでは発表学習が一般化している。ネット中心ではあるが（文献調査は弱い）情報を収集し、グループで分析し、アウトプットする流れがプラットフォーム化され、教科単位での負担は大幅に軽減された。SGH・SSHが協力して発表機材もそろえ、いくつもの発表が同時並行でおこなえる条件も整った。

今後の課題としては、課題研究サイクルのマンネリ化防止も考慮する必要があるだろう。現行のサイ

クルに問題はないが、多くの教科で実施するようになると、「今日もグループワークか」「今日も発表学習か」となり刺激が薄れる可能性がある。今年度は密回避のためポスター発表を見送ったが、ポスター発表、スライド発表、グループディスカッション等々、ゴールの複線化を用意する必要がある。

### ③ グローバルな社会課題に対する関心・意欲・探究心

課題研究に挑まなかったならば、多くの生徒は社会の矛盾や違和感に目を向けることがなかったはずだ。与えられた課題を手際よく処理する学習に満足し、主体的な学びは実現しなかったかもしれない。GL アクティブが社会課題を意識する刺激を与え、GL 探究で学びを進化し、SGH事業が発表の機会を用意しアウトプット体験を重ねる。このプロセスの意義は大きい。刺激（GL アクティブ）としての、大学・企業・国際機関・市役所との連携も重要だ。非日常経験が大きな成長をもたらしている。今年度はコロナ禍でGL アクティブの多くは断念したが、一方で、オンラインという新たな可能性を私たちに示してくれた。時間・場所・費用の壁を取り払ったオンラインの世界は、私たちに新たな可能性を示してくれた。

### ④ コミュニケーション能力

今年度、全校規模で「考える会」と名付けたイベントを実施した。コロナ禍が落ち着きを見せた秋に、1・2学年全員をランダムに割り振り、ほぼ初見の6人グループで思考と対話をするという内容だ。その中で生徒にはファシリテーターとしての体験もしてもらった。生徒のアンケート結果は肯定的な内容であった。コミュニケーションもスキルである。学習経験を積み重ねることにより育むものだ。

英語によるコミュニケーション能力は、課題研究発表会などでの質疑応答の様子で判断することができる。英語発表自体は、本校生徒の多くが可能だ。しかし質疑となるとハードルがあがる。4人編成の英語発表班全員が英語による質疑が可能とは言えないが、必ず一人、二人、高いスキルをもつ班員が存在する。その子が中心となり会話し、またその姿に憧れ、英語学習に意欲的に取り組む好循環が見て取れる。同じ生徒間に理想モデルが多数存在し、英語コミュニケーションが当たり前になる姿はSGHの成果であり、その継続こそが今後の課題である。

## (2) 仮説2について

### ア 仮説2

海外研修の機会を設け、現地の高校又は大学と連携を図り、自分の考えを発表したりディスカッションをしたりする機会や交流活動を設けるとともに、現地での調査活動、体験活動を通して日本との比較を行うことでグローバルな課題の解決策を探究させれば、異文化を理解し、より良き未来を指向することができるのではないかと。

### イ 身に付けさせたい能力等

日本と諸外国を比較検討し異文化を理解しより良き未来を指向する力

### ウ 実施内容

#### 研究開発4 海外グローバル研修

オーストラリア（7・8月）、シンガポール（9月）、オランダ（11月）、ドイツ（3月）・イギリス（3月）で課題研究に係る現地調査、現地校との交流及び課題研究に係るプレゼンテーション、ディスカッション等の実施

※本年度は新型コロナウイルスパンデミックのため、海外派遣事業は中止。代替として、日本



国内留学生とのオンライン交流事業、民間機関との交流事業、イギリス・ドイツ交流高校とのオンライン交流事業を実施。

#### <実施内容詳細>

派遣した5か国において、フィールドワークに加えて現地校や大学生に向けてプレゼンテーションを実施するとともに、ディスカッションを行った。シンガポール研修では、食文化に関する研究をする生徒は、現地のマーケットを訪れフィールドワークをおこなった。幼児教育をテーマにしている生徒は、高校生とのディスカッションにおいて、シンガポールの育児・教育事情について情報交換をおこなった。防災をテーマにしている生徒は、シンガポールでは地震や津波に対しての心配・備えがないことを知り、新たな視野が広がった。オランダでの研修では、生徒は大学生とのディスカッションの中で環境問題への関心が高いことを知ると同時に、学生が実際に行動していることを説明され大きな刺激となった。アンケート結果からは、自身の課題研究にプラスの影響があったことが明確である。またプレゼンテーションとディスカッションの間には、難易度的に壁があることを感じさせるデータであった。プレゼンテーションまでは事前学習で入念な準備を行うことができるが、そのあとの現地高校生とのディスカッションではもどかしさを感じたものと思われる。

#### エ 検証方法

生徒の報告書の分析 生徒アンケート 職員アンケート

#### オ 検証結果

「日本と諸外国を比較検討し異文化を理解しより良き未来を指向する力」

検証に活用したアンケート項目 A・B・C

#### A「英語で他国の人と社会的な話題についてディスカッションができる。」

平成28年度入学生の学年ごとの変移 直近3年間の3学年データの比較 現在校生のデータ  
(アンケート実施時期 第1学年と第2学年は2月実施 第3学年は9月実施)

	とても思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言 えばそう思わ ない	そう思わない	全くそうは思 わない
平成28年度 入学生 1年	0.4%	0.8%	14.3%	35.5%	33.0%	16.2%
平成28年度 入学生 2年	1.3%	4.3%	26.8%	29.4%	24.3%	14.0%
平成28年度 入学生 3年	5.8%	7.0%	23.3%	24.9%	20.2%	18.7%
平成29年度 入学生 3年	3.4%	3.3%	23.0%	41.6%	21.1%	7.7%
平成30年度 入学生 3年	4.8%	10.0%	24.5%	32.5%	18.9%	9.2%
令和 元年度 入学生 2年	3.1%	7.0%	25.3%	33.2%	23.6%	7.9%
令和 2年度 入学生 1年	3.9%	9.4%	23.2%	28.7%	23.2%	14.4%



**B 「外国に行き、英語で現地の人とコミュニケーションを取りながら、共同で調査をしたり交流をしたりすることができる。」**

平成28年度入学生の学年ごとの変移 直近3年間の3学年データの比較 現在校生のデータ  
(アンケート実施時期 第1学年と第2学年は2月実施 第3学年は9月実施)

	とても思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
平成28年度入学生 1年	0.4%	1.9%	15.1%	30.9%	30.0%	21.9%
平成28年度入学生 2年	0.4%	6.4%	26.8%	25.5%	24.3%	16.6%
平成28年度入学生 3年	4.3%	8.2%	21.8%	25.3%	17.5%	23.0%
平成29年度入学生 3年	3.3%	8.6%	21.9%	31.6%	18.2%	16.4%
平成30年度入学生 3年	3.2%	12.9%	27.7%	27.3%	19.3%	9.6%
令和元年度入学生 2年	3.5%	7.0%	25.3%	27.5%	25.8%	10.9%
令和2年度入学生 1年	4.7%	8.7%	20.9%	29.1%	23.6%	13.0%

**C 本校職員アンケート 「5カ国・国際交流の教育効果を検証します。」**

(令和3年2月実施)

大きな教育効果がある。	教育効果がある。	あまり教育効果を感じない。	問題が大きい	分からない
80%	6%	0%	0%	14%

<分析>

生徒アンケートは、生徒の主観的な評価となるのでばらつきがあっても当然であるが、全体としては各年度、各学年とも似通ったアンケート結果といえる。各学年70人前後が海外派遣の対象となることから、学年進行とともに数値は向上する。ただし、コロナ禍により、令和2年度3月から海外派遣は中断しており、成果を期待できる状況ではなくなってしまった。

職員アンケートからは、5カ国・国際交流事業の高い教育効果は明確と言える。ただしこのアンケートは生徒・職員の負担など費用対効果を考慮したものではないので、実施には大局的判断が必要になる。

カ 仮説2 5年間の検証・成果・課題

**日本と諸外国を比較検討し異文化を理解しより良き未来を指向する力**

「百聞は一見にしかず」。海外研修、留学、遊学、旅行、名称は異なれ、海外を自分の目で見ることの教育効果は間違いなく高い。まずはSGHの成果を確認する。

① 生徒が英語でのプレゼンテーションに自信をもつことができおり、海外においてプレゼンテーションを行うことで、英語による発信力を向上させることができた。

- ② 5か国それぞれの国で生徒の多くが課題研究を進める上で新たな視点を見つけ出すことができ、帰国後は自己の経験を他の生徒の伝えとともに、課題研究を進める中心的存在となることができた。
- ③ 英語を使ったディスカッションについては、ALTとの事前研修を重ね改善を図り効果があった。
- ④ シンガポール・ドイツ・イギリス海外研修では、日本の大学、同窓会との連携を図り、講師からは派遣国での経験を基にした指導・助言がなされたため、海外研修が円滑に行われた。
- ⑤ 生徒に現地校で課題研究のプレゼンテーションを行うことを課しているが、課題研究が十分まわっていない場合は、課題研究を進めることと並行して英語によるプレゼンテーションやディスカッションの事前指導を行うため生徒に負担がかかる。課題研究の進め方や現地でのプレゼンテーションの在り方について検討する必要がある。
- ⑥ 生徒の英語を使ったディスカッション力を一層身に付けさせるため、海外（研修先）におけるディスカッションの在り方について理解させるとともに、留学生等とのディスカッション等を経験させる取組を継続する必要がある。

一方、5年間の実施で懸念材料も明らかになった。

- ① 海外派遣リスク
  - ・新型コロナに代表される健康リスク
  - ・イギリスのEU離脱、テロなど国際情勢の変化による治安リスクは常に存在する。
- ② 経済的な負担
 

近距離で期間も一番短いシンガポールでも10万円台の費用、夏休みのオーストラリアは50万円近い費用がかかる。各家庭の所得水準が停滞期に入っている経済状況で、費用面から海外派遣を断念する状況も生まれた。
- ③ 職員負担
 

5カ国9名が毎年の海外引率職員数である。もちろん英語科職員だけではまかなえず幅広く募って引率職員を確保した。しかし、負担が重いのは派遣に至るまでの校内研修プロセスである。現地でのプレゼンテーションを必須にしている以上、入念な準備が必要である。詳細な研修プログラムの内容は海外グローバル研修の項目で述べたが、教員の労働時間削減が社会課題となる中であって、矛盾する願いをすることになってしまった。

しかし、未来への展望も存在する。

- ① 海外派遣プログラムのノウハウは最高の財産である。
- ② 海外交流校との連携はコロナ禍でも維持され、今年度もオンラインで継続している。ヨーロッパもシンガポールもコロナ禍で置かれている状況は同じであり、昨年までの交流が大切な窓となっている。
- ③ SGH事業終了後の、海外派遣プログラムの実施形態も今年度中に整えており、今後も年間3回（3カ国）の実施を決定している。
- ④ 環境問題、感染症対策、国際社会が連携して対処しなければならないグローバル課題がこれだけ明確になっている現在、国際交流の必要性はますます高まっている。

### (3) 仮説3について

#### ア 仮説3

「G Lアクティブ」で得た情報を整理し、日本の歴史・伝統・文化を踏まえてグローバルな社会課題について研究(国際間での文化や社会の対立を排除し、その融和の実現を図る探究)を行い、国際社会に発信可能な英語での報告を行わせれば、英語力の向上、課題解決方法を考え創造的提案を行う発信力が高まり、課題を解決する能力と態度が身に付くのではないか。

#### イ 身に付けさせたい能力等

- ① 課題を解決する能力
- ② 創造的提案を行う発信力
- ③ 英語力

#### ウ 実施内容

##### ① 研究開発1 課題研究

総合的な学習の時間を「G L探究」とし、1年次に「G Lアクティブ」等で得た情報を整理し、グローバルな社会課題から研究課題を定めさせる。

##### ② 課題研究以外の研究開発2 英語力、英語を用いてのコミュニケーション能力の育成、海外からの留学生との交流の機会を設ける。

##### ③ 地域や同窓会との連携

「G L探究」[総合的な学習(探究)の時間]において講演等を実施する。

#### エ 検証方法

- |                |                |
|----------------|----------------|
| ① 生徒によるアンケート   | ③ 進路希望・進路意識の変容 |
| ② 留学生等の外部からの評価 | ④ 英語検定等の達成レベル  |
| オ 関係するアンケート    |                |

#### オ 検証結果

検証に活用したアンケート項目 A・B・C

**A「日本人の立場で、国際的な文化や社会の対立を排除し、その融和を実現する方法を考えている。」**

平成28年度入学生の学年ごとの変移 直近3年間の3学年データの比較 現在在校生のデータ  
(アンケート実施時期 第1学年と第2学年は2月実施 第3学年は9月実施)

	とても思う う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言 えばそう思わ ない	そう思わない	全くそうは思 わない
平成28年度 入学生 1年	1.1%	6.0%	25.3%	30.9%	25.0%	11.7%
平成28年度 入学生 2年	2.1%	11.9%	30.2%	28.1%	16.6%	11.1%
平成28年度 入学生 3年	6.6%	18.7%	25.7%	19.5%	12.5%	17.1%
平成29年度 入学生 3年	5.6%	11.9%	33.5%	26.0%	14.9%	8.2%
平成30年度 入学生 3年	5.2%	11.6%	32.9%	32.1%	13.3%	4.8%
令和 元年度	4.8%	13.5%	34.9%	27.1%	15.3%	4.4%

入学生 2年						
令和 2年度 入学生 1年	3.1%	14.2%	35.0%	30.3%	12.2%	5.1%

**B「他国の人に対して、日本人として日本の歴史・伝統・文化を踏まえてグローバルな課題について解決策を提案できる。」**

平成28年度入学生の学年ごとの変移 直近3年間の3学年データの比較 現在在校生のデータ  
(アンケート実施時期 第1学年と第2学年は2月実施 第3学年は9月実施)

	とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
平成28年度 入学生 1年	0.4%	2.3%	23.0%	37.7%	22.0%	14.7%
平成28年度 入学生 2年	2.2%	9.1%	29.3%	30.2%	16.8%	12.5%
平成28年度 入学生 3年	7.8%	15.2%	26.5%	18.3%	16.3%	16.0%
平成29年度 入学生 3年	5.2%	10.5%	28.5%	34.8%	12.4%	8.6%
平成30年度 入学生 3年	4.0%	10.0%	38.6%	30.1%	12.4%	4.8%
令和 元年度 入学生 2年	3.5%	10.0%	38.0%	30.1%	12.2%	6.1%
令和 2年度 入学生 1年	3.1%	11.4%	36.6%	33.1%	11.8%	3.9%

**C「英語で自分の発信したいことをプレゼンテーションする自信がある。」**

平成28年度入学生の学年ごとの変移 直近3年間の3学年データの比較 現在在校生のデータ  
(アンケート実施時期 第1学年と第2学年は2月実施 第3学年は9月実施)

	とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
平成28年度 入学生 1年	0.0%	3.8%	17.4%	29.8%	28.0%	20.8%
平成28年度 入学生 2年	1.7%	7.7%	27.2%	24.7%	20.0%	18.7%
平成28年度 入学生 3年	5.1%	10.5%	19.1%	28.4%	16.7%	20.2%
平成29年度 入学生 3年	5.2%	9.3%	26.4%	27.1%	16.0%	16.0%
平成30年度 入学生 3年	4.8%	7.6%	28.5%	30.5%	16.5%	12.0%
令和 元年度	5.2%	6.1%	24.5%	31.4%	18.8%	14.0%

入学生 2年						
令和 2年度 入学生 1年	3.5%	9.4%	21.3%	32.2%	19.3%	14.2%

#### <分析>

##### ①「課題を解決する能力」 ②「創造的提案を行う発信力」

アンケートA・Bを根拠データとし分析を試みた。学年進行に応じた成長を読み取ることはできるが、高校段階での劇的な変化を期待するのは厳しい項目ともいえる。アンケートの設問項目自体が高い要求だったかもしれない。

##### ③英語力

「GLコミュニケーション英語」において、オールイングリッシュでアクティビティを取り入れ、4技能統合型授業を行っている。また、課題研究発表会は、GLクラスの発表はすべて使用言語を英語としている。外部発表会の多くも英語発表部門で参加している。もちろん海外研修のプレゼンテーションも全員が英語で行っている。

#### カ 仮説3 5年間の検証・成果・課題

SGH指定3年目のSGH推進委員会の場で、上記のアンケート項目は余りにも「日本人」を強調しすぎているのではないかと話題になった。SGHが目指すのはグローバル人材であり、場合によっては日本より国際社会にアイデンティティを感じる人間も育てるべきではないか、そんな内容であった。国際対立の緩和やグローバル課題の解決は人類共通の課題であり、「日本人として…」という形容が果たしてふさわしいのか、教員の側にも問いが突き付けられた。

今年度の1・2年生に、「佐倉高校の課題研究が目ざす道」といアンケートを実施した。課題研究で重要視すべき目標を、以下の5項目から2つ選んでもらい、その割合を表にした。

A 課題発見力（違和感や疑問を拾いあげ、学びにつなげる好奇心）	51%
B 課題研究の手法を学び、研究サイクルを体験し得た経験値（大学研究への助走）	7%
C 表現能力（プレゼンテーション体験とその能力の向上）	18%
D 協働してプロジェクトを成し遂げるコミュニケーション能力	9%
E 研究内容（質・正確性・エビデンス）	15%

この5年間、教員の側も課題研究で何を重視すべきか悩んできた。指定当初は、SSH事業のノウハウを活かしEの項目、そして英語での表現力を強く意識しCの項目を強調してきた。しかし、指定4年目以降は、高校生段階の課題研究は、「研究結果」より「研究経験」でいいのではないかと方針を微調整し、Bの項目を強く意識するようになった。しかし、アンケート結果ではB項目は最も低くでた。Aの課題発見力が極めて高い数字を示したのは納得がいく。創造的な研究テーマが設定できれば、その後の研究は回り出す。それに失敗すれば、研究はつまづく。生徒は実体験としてその重要性に気付いたのであろう。Bの項目は、将来への貯金ととらえよう。大学入学後、本校生徒は研究・発表のプロセスに戸惑わないはずだ。そのとき役立てば十分なのかもしれない。Dの項目は、コロナ禍の今年、新たな重要性を示してくれた。本年度入学生が登校を始めたのは6月からだ。ほとんどの学校行事も中止になった。そうした状況下、1学年職員が最も懸念したのは生徒間の人間関係の構築であった。課題研究と研究班の編成はそれに寄与し、研究発表は1学年にとって最大のイベントとなった。

指定期間中に、「総合的な学習の時間」は「総合的な探究の時間」に変わった。本校は全生徒が課題

研究に取り組んでおり、なんら戸惑うことはない。現行の課題研究の継続は決定されており、本校探究のPDCAサイクルは今後も続く。

#### ＜資料＞

##### A 評価に活用した生徒アンケートの項目（5年間同じ）

- とてもそう思う
- そう思う
- どちらかと言えばそう思う
- どちらかと言えばそう思わない
- そう思わない
- 全くそうは思わない

- 1 主体的に社会貢献活動に取り組んでいる。
- 2 課題を自ら見付け主体的に課題について研究を深めている。
- 3 将来海外留学をしたり、仕事で国際的に活躍したりしたいと考えている。
- 4 国際化に重点を置いている大学に進学したい。
- 5 海外の大学に進学したい。
- 6 日本の歴史・伝統・文化について語ることができる。
- 7 日本と世界の歴史・伝統・文化を比較研究することができる。
- 8 博物館等の研究機関を利用して研究することができる。
- 9 グローバルな社会課題に対する関心が高く、主体的に社会課題を探究しようとしている。
- 10 異文化を理解し柔軟に受け入れることができる。
- 11 英語で他国の人と身近な話題についてコミュニケーションができる。
- 12 英語で他国の人と社会的な話題についてディスカッションができる。
- 13 外国に行き、英語で現地の人とコミュニケーションを取りながら、共同で調査をしたり交流をしたりすることができる。
- 14 英語で自分の発信したいことをプレゼンテーションする自信がある。
- 15 プレゼンテーションソフトを使った発表ができる。
- 16 日本と世界との歴史的つながりを踏まえ、日本の未来の在り方を志向し、グローバルな視点で歴史、伝統、文化、芸術、政治、経済、環境等について考えることができる。
- 17 日本人の立場で、国際的な文化や社会の対立を排除し、その融和を実現する方法を考えている。
- 18 他国の人に対して、日本人として日本の歴史・伝統・文化を踏まえてグローバルな課題について解決策を提案できる。

##### B 試行として実施したルーブリック自己評価分析

平成29年度・30年度・令和元年度実施

コロナ禍の今年度は授業時間確保と生徒の負担軽減のため実施見送り

<身に付けさせたい資質・能力等>

- ①日本の歴史・伝統・文化を理解する力
- ②思考力・判断力・表現力・情報活用能力
- ③グローバルな社会課題に対する関心・意欲・探究心
- ④コミュニケーション能力
- ⑤日本と諸外国を比較検討し異文化を理解しより良き未来を志向する力
- ⑥課題解決能力
- ⑦創造的提案を的確に発信する力
- ⑧英語力

課題研究プロセス2・3年 自己評価 研究テーマ(タイトル)		年 組 氏名			
身に付けさせたい資質・能力等 ①日本の歴史・伝統・文化に対する理解の深化 ②思考力・判断力・表現力・情報活用能力 ③グローバルな社会課題に対する関心・意欲・探究心 ④コミュニケーション能力 ⑤日本と諸外国を比較検討し異文化を理解しより良き未来を志向する力 ⑥課題解決力 ⑦創造的提案を的確に発信する力 ⑧英語力					
資質・能力	項目	S(4) 新しい発想ができるレベル以上である	A(3) 他の視点や発想を取り入れることができるレベルである	B(2) 求めているレベルに概ね達している	C(1) 求めているレベルにもう少しで達する
②思考・判断・表現・情報活用能力 ③関心・意欲・探究心	テーマのたて方 (研究目的、調査項目の設定)	<input type="checkbox"/> 明確で実現可能な独創的テーマが設定されていて、研究目的や調査項目が分かりやすく整理されて示されている。	<input type="checkbox"/> 明確で、実現可能なテーマが設定されていて、研究目的や調査項目が示されている。	<input type="checkbox"/> 実現可能なテーマが設定されており、研究目的や調査項目が示されている。	<input type="checkbox"/> テーマが設定され研究目的が示されている。
②思考・判断・表現・情報 ⑤異文化理解・未来志向力	先行研究・先行事例等の資料の活用	<input type="checkbox"/> 信頼できる複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料をテーマに関連付け効果的に活用している。	<input type="checkbox"/> 信頼できる複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料をテーマに関連付けている。	<input type="checkbox"/> 複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料を示している。	<input type="checkbox"/> これまでの先行研究・先行事例について示されている。
	研究方法(調査方法)	<input type="checkbox"/> テーマ・研究目的にふさわしい独自の研究方法(調査方法)を用いている。	<input type="checkbox"/> テーマ・研究目的に沿った研究方法(調査方法)を複数用いている。	<input type="checkbox"/> テーマ・研究目的に沿った研究方法(調査方法)を用いている。	<input type="checkbox"/> テーマ・研究目的に沿った研究方法(調査方法)を用いようとしている。
②思考・判断・表現・情報 ④コミュニケーション能力	分析	<input type="checkbox"/> 調査した内容をグループでまとめ、先行研究・先行事例などと比較し、他者にわかりやすいように分析した結果をグラフなどで示している。	<input type="checkbox"/> 調査した内容をグループでまとめ、先行研究・先行事例などとの類似点・相違点など分析している。	<input type="checkbox"/> 調査した内容をグループでまとめている。	<input type="checkbox"/> 調査した内容をグループでまとめようとしている。
⑤異文化・未来志向力 ⑥課題解決力 ⑦創造的提案	結論(提案・改善案) 今後の展望	<input type="checkbox"/> 他国・地域と比較検討できるグローバルな要素のある社会課題となっている。また、調査から明らかになったことについて整理し、得た知見を効果的に用いて、より具体的な提案ができています。	<input type="checkbox"/> 他国・地域と比較検討できるグローバルな要素のある社会課題となっている。また、調査から明らかになったことについて整理し、得た知見を用いて論理的に説明できている。	<input type="checkbox"/> 調査から明らかになったことについて記述(発表)し、得た情報がある程度用いて説明できている。	<input type="checkbox"/> 調査から得られた情報の記述(発表)しようとしている。
①日本の歴史・伝統・文化	日本の歴史・伝統・文化の理解の深化	<input type="checkbox"/> 調査を通して日本の歴史・伝統・文化のグローバル社会における価値を捉え、論理的に説明できる。	<input type="checkbox"/> 調査を通して日本の歴史・伝統・文化のグローバル社会における価値を捉え、テーマと関連付けてより具体的に説明できる。	<input type="checkbox"/> 調査を通して日本の歴史・伝統・文化の価値を捉え、説明できる。	<input type="checkbox"/> 調査を通して日本の歴史・伝統・文化の価値について触れている。
④コミュニケーション能力 *今回は班全体の状況を見てチェックを付けてみてください。	役割分担と協力	<input type="checkbox"/> 自分の役割を積極的に果たしながら、他のメンバーの手助けを行い、グループ研究で優れた研究をリードしている。	<input type="checkbox"/> 自分の役割を十分果たすとともに、建設的な意見を出すなど、グループ研究に貢献している。	<input type="checkbox"/> 自分の役割はおおむね果たしているが、他のメンバーへの寄与はさほど大きくない。	<input type="checkbox"/> 自分の役割は自覚し、それを十分果たそうとしている。

\*中央教育審議会 高等学校部中央教育審議会『ルーブリックを活用したアセスメント』2012.11.19、愛媛大学課題研究ルーブリック、千葉工業高校ルーブリックを参考に作成

**項目に基づく全体評価**  
 合計が25以上かつCが0=S(4)、20以上=A(3)、15以上=B(2)、14以下=C(1)  
**先生のコメント**

**全体評価** 右のいずれかに○をつけてください。S、A、B、C